



人権平和資料館だより

2019年(令和元年)6月

# HUMAN RIGHTS & PEACE 第260号

〒720-0061 福山市丸之内1-1-1

TEL 924-6789 FAX 924-6850

人権と平和は

21世紀のキーワード

[jinken-heiwa-shiryokan@city.fukuyama.hiroshima.jp](mailto:jinken-heiwa-shiryokan@city.fukuyama.hiroshima.jp)

## 「ツルブからの手紙」 ～軍事郵便が届けた一兵士の愛～

期間 6月25日(火)～9月1日(日)



第31信/1943年(昭和18年)4月10日出—7月9日着

この度の企画展は、第二次世界大戦中に遠い南の島から内地の家族へ届いた軍事郵便をテーマにしています。その差出人「小林喜三(きそう)」さんは、下関生まれですが、1940年(昭和15年)2月に本籍地(因島)召集により、ここ福山歩兵四一連隊の営門をくぐりました。翌年11月には、秘匿名「夏部隊」の一員として南方戦線へと赴き、激戦の末1944年(昭和19年)1月14日、ニューブリテン島ツルブ「万寿山の戦闘」にて戦死されました。

展示は彼が激戦のフィリピンや、ニューブリテン島から発信し続けた総数143通もの中から主に当時3歳の息子征之祐(せいのすけ)宛ての44通に着目した内容となっています。

そして、この一兵士の「生きた証」となった軍事郵便や手記から、人はどのような状況下にあっても、愛や夢を育むことのできる素晴らしさを伝えるとともに、その背景にある戦争の悲惨さを通して、今を生きる私たちに「国」とは、「家族」とは、「命」とは、と問いかけているようです。

## 福山市人権平和資料館企画展関連行事

### 講演会 「軍事郵便が届けた愛」

講師 フリーライター 井手 久美子さん

入場無料

■日時 7月28日(日) 午後1時30分～

■場所 福山市人権平和資料館

小林喜三の軍事郵便をはじめて目にした時、私は例えようもない衝撃と、時空を超えた新鮮さを覚えました。それは2006年(平成18年)6月のことでした。

私たちは、終戦60年より市民目線を基調に「下関空襲・終戦展」という企画を地元で展開しています。その第2回企画展の会場へ、喜三の軍事郵便22枚が遺児征之祐さんより持ち込まれたのです。その時、居合わせた誰もが喜三の今に通じる絵の巧みさと、思いの丈を極小文字に託した溢れんばかりの愛情に圧倒され、私たちは即座にその軍事郵便の貸し出しを願い出ました。展示するや否や、会場は想定通り騒然となり、次第に感動と号泣の坩堝(るつぼ)と化したことはいうまでもありません。以後、遺児征之祐さんによる講演や「ツルブからの手紙」と銘打っての企画展など県内外を問わず展開するようになりました。そして今、私は一兵士小林喜三という方はその名前通り喜び(幸運)を3つ持っていると感じています。一つ目は本籍地がある因島(中庄)から宮地種子さんを娶ったこと。二つ目は福山連隊の兵役中にありながら、因島に里帰りしていた妻の出産に立ち会えたこと。三つ目は喜三の「生きた証」となった軍事郵便の数々が、彼の終焉の地への起点となった福山で皆さんの目に触れるということではないでしょうか。



#### 講師紹介

1951年7月6日下関市生まれ  
下関空襲・終戦展実行委員会代表

### 映画会 「硫黄島からの手紙」

■日時 8月18日(日) ①午前10時00分～②午後1時30分～

■場所 福山市人権平和資料館

入場無料

2006年(平成18年)、硫黄島。地中から発見された数百通もの手紙。それは、61年前にこの島で戦った男たちが家族に宛てて書き残したものだ。届くことのなかった手紙に、彼らは何を託したのか。

戦況が悪化の一途をたどる1944年(昭和19年)6月、日本軍の最重要拠点である硫黄島。硫黄の臭気が立ち込め、食べ物も飲み水も満足にない過酷な灼熱の島で掘り進められる地下要塞。このトンネルこそが、圧倒的なアメリカの兵力を迎え撃つ最後の砦であり、絶望的な戦いの舞台でもあった。

アメリカ軍が当初5日で終わると思われた硫黄島の戦いは36日にも及ぶ歴史的な激戦となった。

日本軍守備兵力20,933名のうち96%の20,129名が戦死あるいは戦闘中の行方不明となった。

61年振りに届く彼らの手紙からその一人ひとりの素顔がよみがえって行く……

